

奉納されたキツネたち

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 出土した土人形

はじめに 2016年5月から約4か月に渡って、下京区高辻通堀川東入西高辻町の元京都市立格致小学校内で発掘調査を行ないました。学校の歴史は古く、明治2年(1869)に下京第八番組小学校として開校しますが、1992年に統廃合されました。

調査の概要 発掘調査は校内の北西部と南西部の2箇所で行ない、弥生時代から江戸時代の遺構や遺物が多数見つかりました。北西部では方形の土坑からキツネの土人形が大量に出土しました(写真1・2)。共伴する土器から江戸時代後

期のものと判明しており、この土坑は稲荷社に奉納された土人形の廃棄土坑と考えられます。土人形以外では灯明皿などが出土しています。

稲荷社はどこに? 大正年間の小学校の校内図を見ると、校内の北西付近に講堂と稲荷社が描かれています。

「講堂の横側に稲荷大明神が祀っており、十一月三日にはお火焚^{ひたき}で全校生徒におこし、饅頭^{まんじゅう}をもらったことも覚えております。」「むかしは、はつうまにはこのいなりしゃで、はつうままつりがあつて…」

などと、『格致同窓会百周年記念誌』や『格致こども百年誌』に思い出話として記載されています。

また『住吉神社年中行事』には、「昭和二十年 境内稲荷熊丸神社に(格致小学校稲荷神社)々殿に合遷祀す」と記載されていて、稲荷社が昭和20年には、学校の南側にある住吉大社に移転したことがわかります。

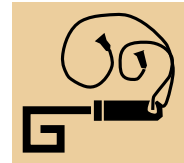
キツネの種類 出土したキツネは破損したものが大半でしたが、頭部は比較的破損が少なく、1個体として見分けやすいため、頭部を数えた結果、288点ありました。



写真2 土人形の出土状況（南西から）



写真3 鍵をくわえたキツネ（左）、宝珠をくわえたキツネ（右）



鍵の模式図



左図の部分拡大

図1 『広益国産考 卷六』に描かれた鍵をくわえたキツネ

形や大きさは多岐にわたります。形態の違いを見ると、頭部は右向き・左向き・ほぼ正面、頭頂部に玉（宝珠）を載せる・載せないものがあります。口には玉・巻物・鍵をくわえる、口を閉じる、口をやや開くものなどがあります。尾の形態も、先に玉が付く、付かないものがあり、玉の形も様々です。

色にも違いがあり、大別すると赤色系、白色系があります。赤色系では土自体が赤いものと、仕上げに赤色顔料で彩色したものと、白色系も同じく土色の違いと胡粉で白く彩色したものがあります。本来は窯で焼成した後、すべて着色して仕上げられたと思われるが、彩色のほとんどが剥がれており、胡粉は今でも手に付くほど剥離し

やすい状態です。

縁起物 今回出土した中では、鍵をくわえたキツネが2点、宝珠をくわえたキツネが1点ありました（写真3）。

伏見稲荷大社の楼門の左右には、この鍵と宝珠をくわえたキツネ像が置かれています。鍵は江戸時代の蔵の鍵を模っています。先が鉤形に曲がった鉄棒に木の柄が付いたもので、蔵の中の宝物を守るということから、縁起物として「宝づくし」という文様の中にも含まれています。また家紋や泥面子にも使用されています。弘化元年(1844)の『広益国産考』(大蔵永常著)に伏見人形製作工程が描かれており、「人形彩色仕立あげの図」の中に鍵をくわえたキツネが描かれていま

す(図1)。出土した鍵は、横棒の部分に銅線が使われていました。また、同じ土坑の中から数本の曲がった銅線も出土しており、本来ならどれかのキツネがくわえていたのかも知れません。

おわりに 現在、神社本庁に所属する神社は約8万社あり、その内の約3万社が稲荷社です。それ以外にも個人の邸内や町内の祠などが祀られており、稲荷信仰が広く篤いことがわかります。

京都市内では、江戸時代の他の遺跡からも、キツネの土人形が出土することが多々あります。伏見稲荷大社にお詣りした折に、縁起物としてキツネの土人形を買い求めたのでしょうか。

(近藤章子)